

# 南の風 FIBA 女子アジアカップ特集号 II

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

## ④ 宮澤 夕貴選手→8点 (2/3の3Pシュートを含む)

言うまでもなく、日本女子代表のストレッチ 4 の代名詞のような選手です。今大会も調子の良い悪しに関わらず、「3P シュートを打つことは私の役目」という思いで打ち続けていました。準決勝のオーストラリア戦、決勝の中国戦において 3P シュート 7/13、確率 53.8%という結果を残しました。常にきついマークを潜り抜け、また周りの見る目が入って当たり前という中、この数字はチームへの貢献度大でした。宮澤選手も大会ベスト 5 に選ばれました。

## ⑤ 赤穂 ひまわり選手→7点 (1/1の3Pシュートを含む)

今年度、日本女子代表の中で大ブレイクした選手の一人です。身長 184cm PF、時には C もこなす選手ですが縦へのドライブインシュート、速攻のランナーとしても存在感を示しました。決勝の中国戦では 3P シュートも沈めストレッチ 4 の選手としても、今後注目です。リバウンドにも積極的に絡み、要所要所でリバウンドに跳び役割りを果たしました。

最後に観戦した感想を書きます。

まずオフェンスです。何といても圧巻は、総得点 71 点の内、38%を占めた 9本の 3P シュートの 27点です。予選から決勝まで安定した 3P シュートの決定率を維持できたことが、優勝した大きな勝因となりました。入る入らないを気にするのではなく、「とにかく打つんだ」という意志を全員が持ち続けたことに女子日本代表の覚悟を見た気がしました。

また、縦のドライブからペイントを突くショットも目を引きました。身長が劣る日本のガード陣ですが、コンタクトを嫌がることなく果敢にドライブを試みました。ドライブからステップを変えたり、リリースのタイミングをずらしたりして、サイズのある中国選手をうまくかわしていました。ガード陣だけでなく全員が縦のドライブを試みる積極性は、ミニバスや中学生の選手の参考になったと思います。

私が課題だと感じたのは、スクリーンを掛ける角度とユーザーとのタイミング&アフタープレイです。スクリーンの掛ける角度が悪いと、ファイトオーバーを容易に許してしまいます。またユーザーの動きだしも早い気がしました。しっかり掛かった状態でスクリーンを利用することが大切です。アフターについては、ダイブすべきスペースの状況把握や、ポップアウトして 3P を狙うなど相手の対応を見て、プレイを選択する必要があると思います。

次にディフェンスです。一番目立ったのはリバウンドでした。相手のショットに対して、渡嘉敷選手や赤穂選手が中国の長身選手をボックスアウトして、宮澤選手や高田選手が飛び込んでボールを取るという戦術はたいへん効果的でした。こうして相手のオフェンスリバウンドを封じたことが、失点を 68 点に抑えることができた要因でした。

ディフェンスの課題もスクリーン絡みです。相手のスクリーンに対してアイス（スクリーナーのディフェンスが下がって対応すること）で守ることが多かったのですが、ユーザーのディフェンスがスクリーンに掛かってしまうケースが何回もあり、ユーザーに 3P を打たれる場面がありました。東京五輪に向けて、ピックに対するディフェンスの確認と実行が必要だと感じました。